

# 待遇コミュニケーション学の位置づけ

## —語用論との関連—

金桂英

本稿では、今までの語用論研究の流れ、語用論分野において重要だと思われる関連理論を概観した上に、語用論の定義、語用論における文脈 (co-text) とコンテキスト (context) の捉え方、人間関係の捉え方、敬語表現の捉え方を記述する。それを踏まえ、語用論と待遇コミュニケーション学の関連を検討する。

### 1. 語用論小史

アロット (2014 [2010]) が示すように、語用論の現状や最近の歴史は、あまりに複雑で、多岐にわたるため、簡潔に述べることは難しい。そこで、本稿では語用論研究の大まかな流れを概観した上で、語用論の分野における重要な研究成果、および関連する理論などを取り上げることにする<sup>1</sup>。

#### 1. 1 語用論研究の流れ

語用論は 1960 年代に言語学者 Austin (1962) と Seale (1969) の発話行為理論 (speech act theory) の研究に端を発した (崎田・岡本 2010 : 3)。

統語論や意味論と同等に、語用論という言葉が独立した研究分野を表すようになったのは、1970 年代のことであった。言語学の一分野として語用論が登場するきっかけは、グライスの 'Logic and Conversation' (『論理と会話』) に関する記事録の影響が大きいと思われる。この記事録は、1960 年代後半から謄写版刷りとして流布していたものである。また、グライスの講義録の一部が公開論文として発表された影響も大きい。更に忘れてはならないのが、語用論に関心を抱いたロレンス・ホーン、ルース・ケンプソン (Ruth Kempson)、ディアドリウィルスンなどの言語学者たちの功績である。彼らは、1970 年代に博士論文やその他の数々の研究業績を発表し、語用論に多大なる影響を及ぼしたのである (アロット 2014 [2010]:19)。

1980 年代には、グライスの理論を批判的に継承した Sperber と Wilson ([1986]1995)<sup>2</sup> の関連性理論の研究へと発展した。また、この発話の解釈や推論のプロセス等の分析を中心にした関連性理論が、認知語用論と称されるようになった (崎田・岡本 2010 : 3)。

1990 年代には、言語使用の社会的側面に焦点を当てる枠組みで、社会文化的語用論と呼ばれるものが発達した。主に社会的文化的規範に関わる外的要因に焦点を当て、ポライトネス、会話のスタイル、レトリック、談話/テキストのジャンルやレジスターなどを研究

の対象としている。認知語用論は言語使用の基盤となる原理を明らかにしようとするものであり、社会文化的語用論は特定の文脈における特定の言語使用者による言語使用の基盤を形成している規範を明らかにしようとするものである（崎田・岡本 2010：3）。

更に、2000年代には、語用論の拡大と既存領域との調整がみられる（加藤 2012）。

## 1. 2 主な関連理論の紹介

本節では、言語行為論<sup>3</sup>、グライスの理論、新グライス派の理論、関連性理論、認知語用論を概観する。

言語行為論は、真理条件的意味論の限界を見出し、「発話は行為である」という見方を基盤として書かれた Austin (1962) に始まる。オースティンによれば、言語とは発話によって話し手が聞き手に対して行う行為（主張、命令、依頼、約束、警告、感謝など）の結果であるとされる。なお、オースティンはことばを用いて遂行される行為を「発語行為」「発語内行為」「発語媒介行為」の3種類に分類したが、オースティン自身、およびその後の言語行為論者が考察の中心としているのは発語内行為である。この理論はまもなくサールによって引き継がれ、Searle (1969,1979) に見るように、発語内行為が成功裡に遂行されるための4条件が設定され、また、発語行為は「断定的」「行為指示的」「行為拘束的」「表出的」「宣言的」の5種類に分類された。更に現在の言語行為論は、Searle and Vanderveken (1985)、Vanderveken (1990,1991,1994) に見るように、従来の理論にモデル理論的意味論や、モンタギュー意味論を組み込んだものとなっており、「発語内行為は成功と充足の条件を持つ」という原理を含んだ11の基本原則、「合致の方向」を含むさまざまな概念を備え、実に微細な分類が可能な意味論となっている（今井 2005：131-132）。

グライスは、発話の理解と解釈にあたっては、言語形式の「解読」のみでは不十分で、必ず聞き手による推論 (inference) が必要とされることを指摘した最初の学者である。グライスは発話解釈における推論の重要性を初めて指摘した点で功績を残したが、彼の提唱した協調の原理とそれを支える四つの公理は、必ずしも会話において遵守されているとはいえない。ただし、「関係の公理」は関連性理論誕生のきっかけの一つとなった。グライスは、発話に指示対象付与と一義化を施したものを「言われたこと」と称し、他の推論および公理へのあからさまな違反によって得られる意味表示をすべて「含意」と考えた。このことが、協調の原理およびそれを支える公理の不備とあいまって、発話解釈の実態を説明する上での失敗につながった（今井 2005:111-112）。

レヴィンソン、ホーン、バック、レカナティなどの人々が新グライス派と呼ばれている。関連性理論と同じく、グライスの理論に源を持つものであるが、両者を分ける根本的相違は、新グライス派がグライスの協調の原理と四つの公理を支持し続ける点である。新グライス派は、グライスの協調の原理とそれを支える四つの公理という、今や克服された概念

を墨守している点は解せないが、それを除けば関連性理論と同じタイプの理論であるといえる（今井 2005:133,136）。

関連性理論は、発話がいかに理解されるかということに関する理論である。ある発話を解釈する際に、聞き手はその発話を含む曖昧な表現が意図する意味は何か、不完全な表現が意図しているもの形は何か、そして指示表現が意図している指示物は何かを決定しなければならない。更に聞き手は、話し手が字義通りの意味を伝えているのかメタフォリカルな意味を伝えているのか、本気で言っているのか皮肉を言っているのか、現実の状況を述べているのか想像上の状況を述べているのかを決定しなければならない。このようなことをすべてし終えても、解釈の作業はまだ終わらない。というのは一般的に、発話は明示的に述べていることよりはるかに多くのこと、例えば、述べられている出来事に対する話し手の態度、そのような出来事の結果、話し手と聞き手の関係を伝えるからである。そして、発話理解は、このような意図された含意が復元されるまでは完全とは言えないのである。解釈のこのような面すべてにおいて、聞き手が持つ、世界、話し手、伝達の性質に関する背景想定、即ち文脈想定が重要な役割を果たすということは常識である。この事実は聞き手に対してもうひとつの問題を提供する。意図された解釈を復元するためには、聞き手は意図された文脈想定の使用をしなければならぬ。しかし、聞き手はどの想定を使うべく意図されているのかをいかにして知るのだろうか。関連性理論の中核をなす主張は、あらゆる発話に対して唯一の意図された解釈を自動的に生成するような機械的な手順はないということである。その代わりに、聞き手には可能な解釈を生成する手順の集合体と、いったん意図された解釈が生成されると、それを認識するための規準（criterion）が備わっている（スペルベル・ウィルソン 1999 [1995]）。

小泉（2001）では、認知能力の観点から、ことばの使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論の研究を、「認知語用論」（Cognitive Pragmatics）の研究として位置づけている。また、「認知語用論のアプローチは、ことばの背後に存在する主体の認知能力の観点から、ことばの使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく、新しい語用論のアプローチである。換言すれば、認知語用論のアプローチは、新しい言語科学の研究として注目されている認知言語学の観点から、ことばの伝達のメカニズムを明らかにしていくアプローチである」（p.194）と述べている。また、内田（2013）では、「最近の潮流のなかで、語用論（pragmatics）という言い方に対し、認知語用論（cognitive pragmatics）という名称を用いることがあり、特にあとで述べる関連性理論の枠組で用いられることが多い」（p.16）と述べている。これに関連して、今井（2005）においても、「関連性理論と新グライス派を併せて「認知語用論（cognitive pragmatics）」と呼ぶことが最近多くなった。認知言語学と紛らわしいが、後者が「認知全般の中における言語の位置を究める学」の意味であるのに対し、前者は「認知とは何かを究めようとする立場から研究される語用論」を指すわけである」（p.136）と指摘している。

以上のように、語用論についての見解は、語用論専門家の間でも必ずしも一致しているとは言えない。語用論を言語使用一般に関する研究と捉える立場もあるし、コミュニケーションの研究と考えたり、言語が持っている伝達機能を通して言語研究を行う学問だと考えたりする場合もある。しかし、話し手の意味の問題と、人間がどのようにコミュニケーションを行うかという問題が語用論の中心にあるという点については、ある程度の意見の一致がみられる（アロット 2014 [2010]）。

## 2. 語用論の定義

本章では、語用論分野において語用論がどのように規定されているか、どういう点に重点が置かれているかを見ていきたい。

まず、言語行為論においては、話し手に重点をおいて、語用論が規定されている。一方で、関連性理論では発話が聞き手にどのように理解されるのかということを中心課題としているため、聞き手の立場からの規定が目立つ。ウィルスン・ウォートン（2009:23-24）では、語用論を「発話の解釈において、言語形式とコンテクスト的要素がどのように相互作用するのかを研究する学問」と規定している。ここでの言語形式と文、名詞句・動詞句などの句は、句を作り上げている語を指し、音韻論、統語論、意味論の対象となるものである。つまり、発話された文の音韻論的、統語論的、そして意味論的な文の構造が、話し手、聞き手、発話された時と場所という要素とどのように組み合わせられ、その発話がそのコンテクストで、どのような特定の解釈を受けることになるのかを研究する学問であると述べている。

認知語用論分野において、小泉（2001）では、「語用論は、発話とそれが行われる状況から、話し手と聞き手との関係において、取り出される意味とその働きを研究する部門と規定することができる」（p.4）と述べている。また、この認知能力の観点から、ことばの使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論の研究を「認知語用論」（Cognitive Pragmatics）の研究として位置づけることにしており、「認知語用論」という用語は、現在までのところ、認知言語学の分野の専門用語として使われていないと指摘している（p.179）。また、「認知語用論のアプローチは、ことばの背後に存在する主体の認知能力の観点から、ことばの使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく、新しい語用論のアプローチである。換言すれば、認知語用論のアプローチは、新しい言語科学の研究として注目されている認知言語学の観点から、ことばの伝達のメカニズムを明らかにしていくアプローチである」（p.194）と述べている。内田（2013）では、「実際の発話とその文脈との関連を追究する学問分野」（p.7）と規定している。

また、メイ（1996 [1993]）は、「これまで述べてきたところから、語用論に関して、次のような暫定的な定義ができよう。言語は人々が伝達しあうための主要な道具である。さ

さまざまな目的で言語を使用することは社会の条件に支配されている。なぜならば、こうした社会条件によって、使用者が伝達手段を手に入れたり支配したりすることが規定されるからである。それゆえ、語用論は人間の言語使用の条件の研究である。なぜなら、こうした条件は社会コンテキストによって決定されるからである」(p.58)と述べている。また、メイ(2005 [2001])では、「言語的な事柄の新しい見方」という我々の考え方と志向性を同じくするフェアシュレンは最近、語用論を「行動という形をとった言語使用に関する言語的現象についての一般的、認知的、社会的、文化的視点」と定義した(Verschueren 1997:7)」(p.31)と述べている。

一方、ジェニー・トマス(1998 [1995])では、語用論の定義を「相互交渉(interaction)における意味」とする方向で話を進めている。この規定について、「これは、意味というのは、ことばの中にもみ存在するものではないし、話者のみ、あるいは聞き手のみによってもたらされるものではないという見解を反映するものである。意味を明らかにするというのは、話し手と聞き手の間の、そして発話の(物理的、社会的、言語的)文脈とその発話の選択可能な意味の間の、意味の取り決めにかかるダイナミックな過程である」(p.25)と述べている。また、「というのは、こうする(語用論の定義を「相互交渉(interaction)における意味」とする)ことによって、発話や文脈だけではなく、話し手や聞き手のそれぞれが意味の生成にどのように寄与しているかということがわかるからだ」(p.26)と指摘している。更に、語用論の定義を巡って、「最近の教科書には2つの傾向がある。語用論を「話者の意図する意味」と等しいと見なすものと、「発話解釈」と見なすものである(まったくこれと同じ用語を使っているとはかぎらないが)。確かにどちらの定義も今日語用論という名の下に行われている研究の何らかをとらえてはいるが、どちらにしてもまったく満足のいくものとは言えない。加えて、これらの定義は語用論の下位分野への大幅に異なるアプローチ[訳注:問題への取り組み方、研究の仕方]をそれぞれ体表しているのである。「話者の意図する意味」という用語は広く「社会的」な見地に立つ研究者たちによく使われる傾向がある。注意をメッセージの「作り手」に向けたものであるが、同時に私たちが聞いたことを理解する過程にはいくつかの意味のレベルが含まれるということもあまいにするものでもある。最後に挙げた定義(発話解釈)は広く認知語用論的な研究方法をとる人たちに好んで使われており、上のような欠点は免れているが、メッセージの受け手に注意を集中しすぎるくらいがあり、実際には発話の形式における社会的制約を無視してしまうことになる」(p.4)と指摘している。

以上のように、語用論の定義は研究者や研究分野によって、話し手側に重点が置かれたり、聞き手側に重点が置かれたりしている。一方で、ジェニー・トマス(1998 [1995])のように、話し手側のみ、あるいは聞き手側のみ重点を置く研究の限界を指摘した上で、両者に目を向ける必要性を提唱している研究者もいることが分かる。更に、社会語用論を提唱しているメイ(1996 [1993])は、語用論を「人間の言語使用の条件の研究であり、こ

こでの条件は社会コンテキストによって決定される」と捉えていることが窺えた。

### 3. 文脈 (co-text) やコンテキスト (context) の捉え方

本章では、語用論において文脈 (co-text) やコンテキスト (context) がどのように捉えられてきたか見ていきたい。

ジェニー・トマス (1998 [1995]: 151) では、文脈 (co-text) とは、ある発話が行われる言語上の (場面上の、ではない) 状況を指すと述べたうえで、文脈の1つに、隣接発話対 (adjacencypair) という、ここでの議論で特に関連の深い概念があり、「隣接発話対」とは、2人の話し手が連続して行く、依存関係のある発話のことであると指摘している。このように、語用論における文脈は、ある発話が行われる言語上の状況であり、会話において分析対象の発話の前後にある発話を指す傾向がある。

一方で、コンテキスト (context) は様々な捉え方が見られた。まず、アロット (2014 [2010]) では、context (コンテキスト) を次のように規定している。「発話のコンテキスト (Context) とは、話し手が伝えようと意図したことを聞き手が解釈するのを手助けする、手掛かりとなるような情報源のことである」 (p.59)。また、発話解釈が発話されたことばやジェスチャーの、コンテキストから独立した特性しか考慮に入れることができないのであれば、発話の含意を導き出すことは不可能であるし、多くの場合には、表出命題や意図された発話内の力すら解釈することができなくなると述べている。語用論は話し手の意味、つまり伝達されたことを扱い、それをどのように聞き手が導きだすのかを研究対象とするため、コンテキストは語用論にとって中心的な位置を占める。実際、語用論は、コンテキストという観点から意味論と区別することによってよく定義されており、意味論がコンテキストによって左右されない意味を扱う分野であるのに対し、語用論は、コンテキストに依存する意味を研究する分野であるということになると指摘している (p.59)。

関連性理論では、コンテキストを次のように捉えている。まず、東森・吉村 (2003) では、コンテキストを文脈と称しており、文脈について次のように述べている。「1つは、文脈の性格である。発話は、何らかの文脈において処理されなければ、話者の適切な意味は復元されない。そういう意味で、文脈は発話解釈過程において非常に重要な役割を果たす。文脈とは、最初から与えられているものではなく、解釈者が選択するものである。解釈者は、記憶の百科事典的知識などにアクセスして、関連性のある解釈を得るために必要な想定を呼び出し、解釈の文脈を必要に応じて拡大する。そして、そのような解釈の文脈は、認知環境を構成する想定集合の一部に相当すると仮定される」 (p.14)。また今井 (2005) では、コンテキストを通常漠然とした意味で用いられるが、関連性理論では「発話の解釈にあたって、推論の根拠・前提となる想定」を示す。話し手がフランス人の夫人と別れ、イギリス女性と再婚したことを聞かされていたのに、その人の発話「家内が里帰

りをしています...」を聞いて「じゃ、奥さんのフランス料理ともしばらくお別れですね」と応じてしまう聞き手は「話し手の現在の妻はイギリス人である」という想定をその時点で忘れてしまったわけで、言い換えれば「話し手の離婚・再婚」というコンテキストはこの時点ではなかったことになる。コンテキストとはあくまでも頭の中にあるものであり、「状況から与えられるものではなく、聞き手が（ほとんどの場合無意識に）選ぶもの」なのでであると述べている (p.121)。

更に、ウィルソン・ウォートン (2009) では、コンテキストの本質について以下のように述べている。

語用論の本には、一般的にコンテキストが持つ2つの側面が書かれている。

- (3) a.コンテキストとは、発話が行われる場所での物理的環境または状況を指す。
- b.コンテキストは、発話より前に起こった（ときにはあとで起こる）文章や会話（談話）を指す。

また、(3) で紹介したコンテキストの問題点は、物理的環境や先行する文章の中から、発話を解釈する上で役割を果たす特定の側面をどのように聞き手がみつけ出すかを説明できないということだと指摘している。また、(3a) にある物理的環境がこの宇宙全体ということであるなら特定の発話を解釈する助けにはならない、それがもっと小さな規模のものならば宇宙の中から発話解釈に関与する要素を区別する方法を知ることがあると述べている。同じように、(3b) にある発話より前に起こった会話が、話し手と聞き手が生まれてこの方聞いたすべての会話を意味していたら、発話の解釈に役に立たないと指摘した上に、先行する会話をどのあたりまでさかのぼって思い出せばいいのだろうと述べている (p.29-30)。以上を踏まえ、ウィルソン・ウォートン (2009) では、コンテキストの特徴と役割について、もっと認知的に分析する必要があると指摘している。また、認知的見地からコンテキストとは、「(発話が行われたという想定以外に) 発話を解釈するために実際に使われる心的に表示された複数の想定」 (p.30) と定義している。この定義について、これらの想定を作り上げるのは、先行する文章の解釈の場合もあり、聞き手が話し手を観察した結果かもしれないし、その場の環境で起こっていることの場合もあると述べている。また、文化的知識や科学的知識、常識的想定もあるし、もっと一般的には、聞き手がその場で思い出すことができる、他人と共通のまたは聞き手独特の情報の場合もあると指摘している。つまりコンテキストは、物理的環境と先行する会話の関連する要素だけでなく、そのほかの数多くの要素も含むということになる。コンテキストの想定が解釈の過程によって引き出される意味に影響を及ぼすならば、話し手によって意図された発話の解釈に気づくためには、聞き手は妥当なコンテキストを選択しなければならない。語用論の主要な課題の1つは、これがどのように行われるかを説明することになるのでであると指摘している (pp.30-31)。

リーチ (2000 [1983]) では、コンテキストはいろいろな意味で理解されており、例えば、

ある発話の物理的または社会的背景の「関与性のある」側面を含むものというのもその一つであると指摘したうえで、コンテキストとは話し手と聞き手によって共有されていると想定される背景的知識で、問題となる発話によって話し手が意味することを聞き手が解釈するのに役立つもの、と規定している (p.18)。

崎田・岡本 (2010:154) は、語用論が他の言語学の部門と異なっていた点は、発話を取り巻く状況、すなわちコンテキストの重要性にいち早く気づいたことにあると述べている。崎田・岡本 (2010:154-155) では、リーチの規定からコンテキストを発話理解のための解釈関数として捉えていることがわかると指摘している。また、あるコンテキストにおいてある意味として解釈される発話が、別のコンテキストではまた別の意味になるという解釈の可能性と制約を与えるものとしており、こうした立場はこれまでの語用論において自明視されていたものであり、発話のみが聞き手の理解や解釈の対象であるという信念として数多の語用論的分析の基盤となっていたと述べている (崎田・岡本 2010:154-155)。更に、これに対し「Sperber and Wilson ([1986] 1993/1999) の提唱する関連性理論では、コンテキストとは聞き手による発話の解釈に当たって発話の解読的意味とともに推論の前提として使われる想定 (assumption) の集合であり、推論過程において選択され利用されるものであると捉えている。彼らのコンテキスト観はこれまでの語用論的立場からの脱却を示す点で画期的なものであったが、本質的にゲシュタルト的な性質を持つコンテキストを命題としての想定集合として矮小化してしまったために、Chomsky 以来の命題操作的な計算論的認知主義に語用論を導くという弊害を持つ」 (p.155) と指摘している。

加藤 (2004) では、文脈を①言語的文脈、②状況的文脈、③世界知識<sup>4</sup>、④推論によって①②③から引き出した情報や考え<sup>5</sup>という四つに分類している。言語的文脈を「発話の前後にある言語形式である」と規定しており、ジェニー・トマス (1998 [1995]) での文脈 (co-text) の規定と類似している。また、状況的文脈を発話の物理的状況 (現場に居合わせれば直接観察できる要素をすべて含んでいる) やその認知・解釈のこと、世界知識を独立に参加者が持っている知識の総体であると規定している。①②③④の順に話し手と聞き手のあいだの共有度が低くなると述べている (p.16)。更に、私たちが実際にことばを使うときには、必ず特定の場面で使うので、常になんならかの文脈がくっついており、語用論はこの文脈を切り捨てずに実際に用いられたことばの意味やはたらきを考える領域だと述べている (p.16)。

社会語用論を提唱しているメイ (1996 [1993]) は、コンテキストは動的な概念であり、静的な概念ではないと述べている。また、広い意味で言えば、コンテキストとは、コミュニケーションの過程において、コミュニケーションに参加している人たちが相互行為をすることを可能にし、その相互行為における言語表現を理解することを可能ならしめる環境、と解することができる指摘している (pp.53-54)。また、社会とコンテキストの関係について、次のように述べている。「言語行動とは社会行動にはかならない。人々が話をす

るのは社交するためある。この場合の「社交」という用語は広い意味で用いられている。つまり、楽しい時を過ごしたり、他人に自分の思いを明かしたり、何らかの重大な目的を成し遂げたりすること（たとえば、家を建てたり、契約を結んだり、問題を解決したりすること）である。こうした基本的な事実にはさらに二つの同じく基本的な事実が含まれている。その一つは、集い、社交する（すなわち、社会的存在として自分の思いを述べる）際に人々が実際に話していることを、考察の対象としなければならないということである。二つ目として、言語学者が、言語を使っている人々の間に何が起きているかを把握できるかどうかは、言ひとえに、その相互行為が行われているコンテキスト全体をしっかりと把握できるかどうかにかかっているということである」（pp.199-200）。

以上のコンテキストの規定から、語用論におけるコンテキストは、話し手が伝えようと意図したことを聞き手が解釈するのを手助けする手掛かりとなるような情報源、話し手と聞き手によって共有されている背景的知識、発話が行われる場所での物理的環境または状況、話が行われる場所での物理的環境または状況、発話を解釈するために実際に使われる心的に表示された複数の想定（認知語用論）と捉えられていることが分かる。また、コンテキストと社会の関係については、言語は社会的なコンテキストで発展してきたため、個々の話者によってではなく社会によって統制されていると捉えていることが窺える。

#### 4. 人間関係の捉え方

ジェニー・トマス（1998 [1995]）では、「間接的な言い回しの使用の裏にある法則性の基本軸は、言語を問わず語用論的な言語選択を支配していると思われるような配慮を取り込んでいるという意味では、言語を超えた共通性を持っていると言えるが、その基本軸を現実はどう反映させるかという点では文化による違いが大きい」（p.135）と述べており、人間関係を構成する主な要素として、以下の項目を取り上げている。

- ・話し手が聞き手に対して持っている支配力（power）
- ・話し手と聞き手の間の社会的距離
- ・内容 X が、その文化 Y ではどの程度、相手に負担をかけることと見なされるか
- ・話し手と聞き手の間の権利と義務の相対的關係

支配力については、「一般論として、相手が自分にとって支配力を持つ人物であるときには、そうでないときより間接的な言い回しを使う傾向がある」（pp.135-136）と述べている。また、支配力を正当支配力、遇像支配力、専門支配力に分けており、それぞれを以下のように規定している。①正当支配力（Legitimate Power）：ある立場、年齢、社会的地位にいる人は、他の人に何かを指示・依頼する権利を与えられている。②遇像支配力（Referent Power）：何かの点で人々から尊敬されたり憧れたりしている人は、人々に対してある支配力を持つ。③専門支配力（Expert Power）：人々が必要とするような特殊技術や知

識を持っている人は、人々に対してある支配力を持つ (p.138)。

また、社会的距離については、「あるやりとりの場面で、相互に絡み合っただ敬意の度合いを決定する、心理的に実在する要素（地位、年齢、性、新密度など）で構成されると見ることがよいだろう。支配力と社会的距離は、区別しにくいことがある」 (p.140) と述べている。相手にかかる負担の大きさについては、「「負担の大きさ」というのは、頼みごとが相手にとってどのくらいたいへんなものかということである」 (p.141) と指摘している。

権利と義務については、「ある発話行為が相手に大きな負担をかけるにもかかわらず、ほとんど間接的な言い回しをすることなく行われる場面を説明するのに必要なのがこの要素である」 (p.143) と述べている。

更に、語用論上の要素の相互作用について、以上の要素があらかじめ決まっただ、その社会のすべての成員が認めるものと固定的に考えるのは間違っただと指摘したうえに、人が持っている支配力や権利と義務などについて、異なっただ意見が出ることはよくあるし、そうした要素について相手を感じていることに変化を起こさせるためにことばを使うこともあると述べている (p.143)。また、「ここで語用論と社会言語学の違いが表れている。社会言語学では、ことば（例えば、呼びかけ表現）の使い方を観察して、そこで現れている人間関係を分析する。これに対して、人間関係を変える（あるいは維持する）ためにことばがどのように使われるかを観察するのが語用論である」 (p.145) と指摘している。

ユール (2000 [1996]) では、「語用論的観点で考察の対象として射程におさめるのは、話される事柄と話されない事柄がどのように決定されるかという問題である。この問題に対する答の根底に伏在するのは距離という概念である。近接は、それが物理的、社会的、あるいは概念的なものであり、経験の共有を意味する。話し手は聞き手が自分にどの程度「近い」のか、あるいは、「遠い」のかを推し量り、どの程度ことばにすればいいのかを決めてゆかなければならない。語用論は話し手と聞き手の間の総体的距離がどのような形式で表現されるかという問題を探求する学問である」と述べている (p.4)。

以上のように、語用論では人間関係を社会的背景や文化などの側面からの支配力 (power)、社会的距離 (地位、年齢、性、新密度など)、頼み事が相手にかかる負担、権利と義務などの要素によって構成されていると捉えていることが分かる。

## 5. 敬語表現を巡って

ジェニー・トマス (1998 [1995]) は、敬意表現と語用論の関係について「私が敬意表現と語用論とはあまり関係がないと言う理由は、もし話し手がわざとその社会の行動規範を破ってやろう（そしてその結果を引き受けよう）と望む余地がないなら、つまり話し手が敬意表現を用いるかどうかを自ら選ぶのでないなら、その使用法は社会言語学的規範（第7章参照）によって決定されていると考えるからである」 (p.165) と述べている。また、

「もしある特定の形を用いることがある状況で義務づけられているのであれば、語用論的には意味がない。敬意表現を使うか否かが語用論研究者にとって興味の対象となるのは、そこに選択の余地があるとき、つまり話し手が既存の規範に挑戦することによって、なんらかの変化を引き起こそうと試みるときのみである」(p.166)と指摘している。

以上のように、ジェニー・トマス(1998 [1995])では話し手が敬意表現を用いるかどうかを自ら選ぶのでないなら、敬意表現は社会言語学的規範によって決定されているため、語用論とあまり関係ないという立場をとっている。しかし、日本語において、話し手が敬意表現を用いるかどうかを自ら選ぶ場面は本当にないのだろうか。あるとしたらどのような場面なのか。この二つの問いについては、議論の余地があると思われる。

## 6. 語用論と待遇コミュニケーション学の関係

語用論の定義から、語用論研究において話し手に重点をおく研究、聞き手に重点をおく研究、話し手と聞き手の両者に目をむけている研究が行われていることが分かった。これに関連して、ジェニー・トマス(1998 [1995])は、今まで語用論を「話者の意図する意味」と等しいと見なすものと、「発話解釈」と見なすものであるが、どちらにしてもまったく満足のものとは言えないと指摘している。また、「話者の意図する意味」と等しいと見なす立場においては、注意をメッセージの「作り手」に向けたものであるが、同時に私たちが聞いたことを理解する過程にはいくつかの意味のレベルが含まれるということをあまいにするものでもであると述べている。更に、「発話解釈」と見なすものは広く認知語用論的な研究方法をとる人たちに好んで使われており、上のような欠点は免れているが、メッセージの受け手に注意を集中しすぎるくらいがあり、実際には発話の形式における社会的制約を無視してしまうことになる」と指摘している。以上を踏まえ、話し手と聞き手の両者に目を向ける必要性を提唱している。一方、待遇コミュニケーション学においては、コミュニケーション主体である表現主体と理解主体の両者に重点が置かれており、表現主体の表現行為のみではなく、理解主体の理解行為、そして、表現行為—理解行為の「やりとり」および表現行為—理解行為、表現行為—理解行為、...という「くりかえし」も研究対象としている。

語用論分野では、文脈(co-text)を隣接発話対などのある発話が行われる言語上の状況と捉えていることが窺えた。コンテキスト(context)については、①話し手が伝えようと意図したことを聞き手が解釈するのを手助けする、手掛かりとなるような情報源、②話し手と聞き手によって共有されている背景的知识、③発話が行われる場所での物理的環境または状況、④発話と一次文脈を用いて行う推論、⑤発話を解釈するために実際に使われる心的に表示された複数の想定(認知語用論)など、様々な捉え方が見られた。また、社会語用論分野ではコンテキストと社会の関係について論じており、言語は社会的なコンテク

ストから発展してきたため、言語の使用は個々の話者によってではなく社会によって統制されると主張している。待遇コミュニケーション学における「場」とは、コミュニケーション主体が認識する、コミュニケーション主体がコミュニケーション行為を行う時間的(文脈・経緯)および空間的(状況・雰囲気)な位置のことである。「場」は、コミュニケーションの制約となるものであると同時に、固定的なものではなく、コミュニケーション主体が作っていく動的なものだといえる。以上のように、語用論分野では、文脈とコンテキストを、隣接発話対などの言語上の状況や、発話の解釈に手助けになる情報源や、物理的な環境と捉える傾向がある。また、認知語用論では心的に表示された複数の想定と規定しているが、主に聞き手の解釈に焦点を当てている。一方、待遇コミュニケーション学における「場」は、客観的な時刻や場所を意味するのではなく、主体が認識する時間的・空間的な位置と捉えている。

語用論分野では、人間関係を捉える際に、支配力(power)、社会的距離(地位、年齢、性、新密度など)、頼み事が相手にかかる負担、権利と義務の相対的關係を主な要素としていることが伺えた。また、管見の限り人間関係に関する記述が見られたのは、ジュニー・トマス(1998 [1995])とユール(2000 [1996])のみであり、人間関係に関する記述が非常に限られている。一方で、待遇コミュニケーション学では、「人間関係」をコミュニケーション主体自身が自己と他者との関係をどう認識するのか、どのようなものとして位置づけようとしているのか、という観点で捉えようとしている。また、「自分」、「相手」、「話題の人物」という人間関係の捉え方は、客観的に、固定的に規定されるものではなく、個々のコミュニケーション主体がそれをどう認識し、位置づけるかということに基づく、相対的、動的なものである。それぞれのコミュニケーション主体は、「自分」、「相手」、「話題の人物」の関係を、「上・下・親・疎」の関係、それぞれの「立場や役割」、「恩恵を与える者・受ける者」などといった関係として捉え、そこには好き嫌いといった感情なども含めた複雑な認識が絡んでくる。以上のように、語用論分野では人間関係を社会的背景や文化などの側面からの諸要素によって構成されていると捉えていることが分かる。一方、待遇コミュニケーション学ではコミュニケーション主体自身が認識する「自分」、「相手」、「話題の人物」との関係性に注目している。

#### 【注】

- (1) 語用論において重要だと思われる関連理論は、主に語用論の事典や概説書を参考に選定している。
- (2) 崎田・岡本(2010)をそのまま引用しており、英語版の書籍の第二版が1995年に出版されている。
- (3) 一時期までは「発話行為理論」と呼ばれていた(今井2005)。
- (4) 加藤(2012)では、知識文脈とも称している。
- (5) 加藤(2012)では、付加文脈と名付けている。

## 【参考文献】

- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』 大修館書店
- 今井邦彦 (2002) 「真の語用論—関連性理論の斬れ味—」 『語用論研究』 第 4 号、pp.55-68、日本語用論学会
- 今井邦彦 (2005) 「語用論」 『言語の事典』 (新装版)、中村平三 (編)、pp.109-143、朝倉書店
- 今井邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論：入門から総論まで』 開拓社
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう：意味論と語用論の役割』 岩波書店
- 内田聖二 (2013) 『ことばを読む、心を読む：認知語用論入門』 開拓社
- 内田恵・前田満 (2007) 『語用論—英語学入門講座・第 11 巻—』 英潮社
- 加藤重広 (2004) 『日本語語用論のしくみ』 研究社
- 加藤重広 (2007) 「ソーシャルから語用論へ」 『月刊言語』 36-5、pp.40-47、大修館書店
- 加藤重広 (2009) 「動的文脈論再考」 『北海道大学文学研究科紀要』 128、pp.195-223
- 加藤重広 (2012) 「語用論の基礎から展開へ」 日本コミュニケーション障害学会 第 38 回講習会、2012 年 2 月 19 日 (大阪市立大学医学部付属病院)
- 加藤重広 (2015) 『日本語語用論フォーラム.1』 ひつじ書房
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 大修館書店
- 久保進 (2002) 「言語行為論への招待—関連性理論からの批判に答えて—」 『語用論研究』 第 4 号、pp.69-83、日本語用論学会
- 小泉保 (2001) 『入門語用論研究—理論と応用—』 研究社
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』 研究社
- 中島信夫 (2012) 『語用論—朝倉日米対照言語学シリーズ 7—』 朝倉書店
- 中村芳久 (2002) 「認知言語学からみた関連性理論の問題点」 『語用論研究』 第 4 号、pp.85-102、日本語用論学会
- 崎田智子・岡本雅史 (2010) 『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』 研究社
- 吉村あき子 (1999) 「関連性理論の動向」 『英語青年』 Vol.145、No.4、p.231
- アロット, ニコラス E. (2014 [2010]) 今井邦彦 (監訳) 岡田聡宏・井門亮・松崎由貴・古牧久典 (訳) 『語用論キータム事典』 開拓社. [Nicholas Allott. (2010). *KEY TERMS IN PRAGMATICS*. London: Continuum International Publishing Group.]
- ウィルスン, D.・T. ウォートン (2009) 『最新語用論入門 12 章』、今井邦彦 (編) 井門亮・岡田聡宏・松崎由貴・古牧久典・新井恭子 (訳)、大修館書店。
- ヴァンダーヴェーケン, D. (1997 [1990]) 久保進 (監訳)、西山文夫・渡辺扶美枝・渡辺良彦武 (訳) 『意味と発話行為』 ひつじ書房. [Vanderveken, D. (1990). *Meaning and Speech Acts* Vol. I *Principles of Language Use*. Cambridge Univ. Press: Cambridge.]
- Vanderveken, D. (1991). *Meaning and Speech Acts* Vol.II *Formal Semantics of Success and Satisfaction*. Cambridge Univ. Press: Cambridge.

- ヴァンダーヴェーケン, D. (1998 [1994]) 久保進 (訳) 『発話行為理論の原理』松柏社. [Vanderveken, D. (1994). *Principles of Speech Act Theory* [Cahiers d'Epistemologie, 9402]. Montreal : Universite du Quebec a Montreal.]
- オースティン, J. L. (1978 [1962]) 坂本百大 (訳) 『言語と行為』大修館書店. [Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.]
- グライス, P. (1998 [1989]) 清塚邦彦 (訳) 『論理と会話』勁草書房. [Grice, P. (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass : Harvard University Press.]
- グリーン, G.M. (1990 [1988]) 深田淳 (訳) 『プラグマティクスとは何か—語用論概説』産業図書. [Green, G.M. (1988) *Pragmatics and Natural Language Understanding*. Lawrence Erlbaum Associates.]
- サル, J.R. (1986 [1969]) 坂本百大・土屋俊 (訳) 『言語行為—言語哲学への試論—』東京書房. [Searle, J.R. (1969) *Speech Acts: An Essay on the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.]
- サル, J.R. (2006 [1979]) 山田友幸 (監訳) 『表現と意味: 言語行為論研究』城信書房. [Searle, J.R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.]
- Searle, J.R and Vanderveken, D. (1985) *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ジェニー・トマス (1998 [1995]) 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理 (訳) 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社出版. [Jenny Thomas. (1995) *Meaning in interaction : an introduction to pragmatics*. London: Longman.]
- スペルベル, D.・D. ウィルソン (1993/1999 [1986/1995]) 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) 『関連性理論—伝達と認知』研究社. [Sperber, Dan and Deirdre Wilson. (1986). *Relevance: Communication and Cognition*. (2nd ed: 1995). Oxford: Blackwell.]
- ブレイクモア, D. (1994 [1992]) 武内道子・山崎英一 (訳) 『ひとは発話をどう理解するか: 関連性理論入門』ひつじ書房. [Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.]
- メイ, ヤコブ L. (2005 [2001]) 小山亘 (訳) 『批判的社会語用論入門—社会と文化の言語』三元社. [Jacob L. Mey. (2001) *Pragmatics: An introduction, Second Edition*. Oxford: Blackwell.]
- メイ, ヤコブ L. (1996 [1993]) 澤田直美・高司正夫 (訳) 『ことばは世界とどうかかわるか—語用論入門』ひつじ書房. [Jacob L. Mey. (1993) *Pragmatics: An Introduction*. Oxford: Blackwell.]
- ユール, G. (2000 [1996]) 高司正夫 (訳) 『ことばと発話状況: 語用論への招待』リベール出版. [Yule, George. (1996) *Pragmatics*. Oxford University Press.]
- レヴィンソン, S.C. (2007 [2000]) 田中廣明・五十嵐海理 (訳) 『意味の推定—新グライス派の語用論』研究社. [Levinson, S.C. (2000) *Presumptive Meanings : The Theory of Generalized Conversational Implicature*. MIT Press, Cambridge, MA.]

リーチ, G. (2000 [1983]) 池上嘉彦・河上誓作 (訳) 『語用論』 紀伊國屋書. [G. Leech. (1983) .  
*Principles of Pragmatics*. London: Longman.]

(キンケイエイ・早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程)